特選
2020
金融広報中央
委員会会長賞

第53回「おかねの作文」コンクール

値段では決められない価値

大分県・向陽中学校　２年　陣内　結鈴

私には、亡くなったおじいちゃんとの大切な思い出があります。

小学生の頃、私は祖父母が大好きで毎週末祖父母の家に遊びに行っていました。公園に一緒に遊びに行くのも好きでしたが、私が一番好きだったのは、祖父から手渡しでもらった500円玉を手に持ち、祖父と一緒に近所のスーパーへお散歩がてらにお菓子を買いに行くということでした。そのお散歩の途中で、石けりをしたり、花をつんだりすることもあり、帰る時間にはもうまっ暗なんてこともよくあることで、祖母に怒られるなんて毎週のことでした。でも、怒られるのが、またなんだかおかしくて祖父と顔を見合わせながら「あはは」と笑い合っていました。

そんな日々も過ぎ、私も小学６年生になったあたりから、勉強に追われる日々で、また、なんだか祖父母と遊んでいるのは恥ずかしいという思いもあって行く回数も段々と減っていきました。また行ったとしても宿題をしなくてはいけなかったので、散歩に行く日もあまりなくなっていました。それでも祖父は帰り際に「ほい」と言って、いつも500円玉をくれました。私はそのお金をゲーム代などに使っていました。ある日、私はそのことが母に知られて、怒られはしなかったけれど、「おじいちゃんからもらったお金は大切にしなさい」と真剣な表情で言われました。私は、“もうもらったものなのに、どうしてだろう”と思い、使い方は特に変えませんでした。中学生になってもなにも変わらず、過ごしていました。しかし、祖父は少しずつではありましたが、体の調子が悪くなっていき、中学２年生の桜がさく時期には歩くのも危うい状態になっていました。

そして、桜が散ってしまった頃、その時がついに訪れてしまいました。私はそれから祖父とのことをひんぱんに考えるようになっていました。毎日毎日、あれが楽しかったなぁなどと考える中で、気がかりになっていたことが一つだけありました。それは母の言っていたあの言葉でした。今、考えてみると、い

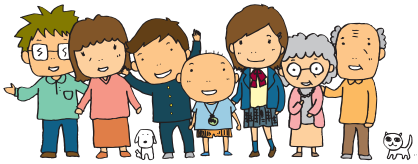
© 金融広報中央委員会2020

つもならただの500円玉でも、祖父からもらったというだけで、価値はぐんと上がったような気がして、一つでも残しておけばよかったなと後悔しました。

そんな中、そう式がすんだ後に、親戚たちで祖父母の家に行くことになりました。親戚でお話をしたり、ご飯を食べたりしました。そして、私があまり入らせてもらえなかった祖父の部屋に入ろうということになりました。

祖父の部屋に入ると、祖父独特のお花のような匂いがしました。祖父の使っていた、たななどを見ていると、ある小さな小物入れのようなものを見つけました。その中には私があげた手紙やハンカチなどがきれいに折りたためられて入っていました。私はびっくりするものを見つけました。なんと、その小物入れの奥を見てみると、そこにはたくさんの貯金箱がありました。その貯金箱には私の名前が書いてあって、中には大量の500円玉が入っていました。私は、その時、祖父は私にあげるためにいつもためていたということが分かりました。いったい何円私にあげていたのでしょうか。きっと大金にちがいがありません。私はその時、本当に泣くほど後悔しました。私は祖父が大切にためた、思いのこもったものを、あまり使わないものなどにつぎこんでしまいました。もう祖父の手で温かくなったことのある500円玉はありません。

私はこの経験から、お金にも、思いをこめることができることを知りました。またお金の価値はそれ自体の値段ではなく、もっと高いものにも成りうるということも知りました。いつでも何気なく使っていたお金は、私がかせいだものではなく、誰かがかせいでいて、それらはなんらかの思いがあって私のもとにきているのだなと、改めて分かりました。何円であっても、大切に大切に使っていかなくてはいけない、私はそれをこれから絶対に守っていこう、そう心にちかいました。



© 金融広報中央委員会2020